



十論為辯抄

始





為辨抄

十論大綱

運二二房

分よる辨おの運二講送の辨として傳書  
 一處實の二用とあつゝい仲抑し善惡の二  
 とはよくはらうと佛澄の俗談事話より佛師の  
 するにやうにけり危入るの事にもはるく  
 それより十論の大意と論語一部と鑑として  
 世にこれを孔子の和節とあつゝい文に孔子の凡推と  
 中より静者もやうにこゝ意をあらわして石と佛澄  
 の論語ともいふはらうとして十論より對向の詞  
 の端的らうと和漢して實の意をあらわして連統

わすれぬ



凡後の強柔といふ一に於て我家の如馬強も  
文章訓といひ教誡訓といふ二様の家訓ありて  
知と世に凡雅ありといひ教と人化は勸懲あり  
とありゆれとふといれ柔の和とて好むべき  
一貫抄より先後抄の如くまことありて二訓は  
文教の差ふと辨とて儒書に現在とてしなして  
け書れ柔の文章とて一へ仰せと未采といひ  
和盜嬉とすの教誡とらつて畢竟朝野昏之  
の先後あれと家と建了時のさ地あれ儒文仰教  
此當用とあり一はれん文章より一處とあり  
教誡より実とらくとん文章より一は冠とらくと

世よは柔の威儀とて柔教誡とて柔赤  
世外に明の因果とて柔儒教の差ふと  
文章にこれれ教誡とて道一致ありとや今柔  
文章と教誡の先後とて家の説するありと  
けとて徳徳の存ぬとて一はれん今此儒論  
にも仰祖通載の金湯篇の補教篇の文章に  
いへり異端辨正と論とありて我の  
け論ありとあり勝負とありとあり  
けとて和也孔子のさ地とありと聖人の言説  
の和といひて履象の書とありと儒の  
の用とありて眼おの書とありと  
愚ちらお也仰をの用と説く用とあり

凡後の強柔といふ一に於て

愚ちらお也







と評し孔子之施教也先之以詩書而導之以孝悌  
誦之以仁義と詩書を儒の根幹として孝悌  
仁義に流すのほれと評す也孔子はれとやうけ  
遠而直之者詩也近而愈明者書也と云ふ  
文章の飾とい内なる好字の明と云ふ論語と文先  
教後の用と云ふ一仁義に流るる及んて先後おの  
誦る孔子と凡雅のを祖きんをせしめく文章の用と  
評す也用のあり用と一入をあるて一用とあり  
非ともいひて鬼ともあり也字本も情と云ふ一尊  
一もおといひてきと一尊尊に云と云ふ也  
京宋の情と云ふと云ふ一和漢と文者の所と云  
て文と評し一用あるも一教と評し一用あり也論語

の詩といひ文と云ふ京宋の徳文の文と云ふ詩評す  
その評文より虚と云ふげいといふの身子に對して  
孔子の百語百變ちらと行るる時の語脈と云ふ  
と云へば起ても仁義と云ふ仁義の實と云ふ  
いせし憶病の殿の者ありて人々をえ氣と云ふ  
と云ふと一葵附の利と放るるも云ふ病と云ふ  
と云ふと一病人と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ  
と云ふと一言の事と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ  
自在の事と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ  
時く詩書の文と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと  
論と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ  
と云ふと一孔子と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

為詩抄上



とてしこ殿と和年の三子とありけり論語の大方  
の助語ありけりこれの文章の優劣と評する  
たれん風雅の言者哉といふ返をくわむ  
へまら論語は孔子の世風雅あるをいふ子游  
の牛刀の風諭のまら子路の絶凡の誦語の  
まら牛のけりまら絶のけり文章の風雅  
の余をまらありけり論語は伯文の教訓状あるけり  
曾子より子思のけり孔子思のけり孔子のけり  
孫より孔子のけりまら孔子のけり孔子のけり  
論語一部と鑑とて孔子のけり孔子のけり  
一知和而和不以礼節之亦不可行と孔子  
の文の温厲とまら一即之也温聽其言也

厲とて和節と温厲と訓練の境極りて訓練  
の潜就肯の本懐ありけり潜就肯の大方の言語  
論語のけりまら今日の言語論語ありけり  
一言徳い人間の文飾ありまらと儒学者のけり  
まらけり下学上達の論語と失るい孔子の訓の  
表垂表とけりまら教誡の文と表しとまら孔子  
の風と表しとまらまら孔子の十哲あり  
七十二子の学ありまら孔子の風とまら孔子の  
孔子の権表とまら孔子の瞻前顧後の語とまら  
まら顔回いけりまら孔子の聖回言幾日不違  
思也屢空とて孔子の二用とまら孔子の何れ  
違はまら言語の強しきけりまら幾言とて

の言

五



孔子のまゝいかに何しもの事か。解空の称名  
の師系の才子あるんや。然るに万法の違順と  
一理の虚妄とをわけていせけねし。是れとすべし  
おほく不覺の哀慟して天喪早くして後死者  
不與於斯文と云ふ斯文の爲ありて何する  
の爲ありしもの顔回さへ能信而不能死。虚妄  
の油ひと氣はくひてやせきといふ曾子といひ子思と  
いひ孟子も孔子の文と傳へて教誡の理傳はる  
るや。あれとも文章の虚と傳へるもや對向ありて  
虚を分ちてりて舞の後井負文のあらはれ孔子の  
言。似而非ちる者といひしや。て末くの後者  
達して虚妄の理はるし及んばんはるく論語の

興廢と云ふおに堅く虚とせし。こ一偏は文と  
ありて文教の先後と失つ。いねし北宋の二程  
といふ。その子姪は漢魏の比に傳授もひらき  
て北宋の世に傳はらむ。ておし禪家の  
虚活より例し詠諧の詞と云はる。傳者の言面  
と若しありし孔子も論語も云と云て道徳の  
販とせし。ちてを多く虚妄と云はる。漢儒説  
皆非也といふかりし。權変時宜の比と云て  
存。師老三家。以是非。非。仰氏之言。以之揚墨  
む。五。近。理。字。者。當。如。陰。声。美。色。以。遠。之。と  
おのちり剛より例の文章と後して教誡  
と云し。のまらる。た。よ。勸。善。懲。惡。と。云。は。る。か。り。も



仰書も儒書の是し似る者あり儒るも所為の  
所しちうまひ下あり仰を権化といひし権者  
といひか三葉一微笑の家附おれり曾安より一以の  
秘傳あり端木、辨舌と目連の非通しはさり  
言偃る字文も所難の設法も及んず須善提の  
戒行も函子憲の注りも論まれば優者もあく  
論語の教も標嚴の誠も不明しもの讀書にあり  
て仰代のまゝ細とるるやあはれす程子も安んず  
と孔子の詞と杜ははききく程子のまじと仰家に  
いれむしとやはらと二程のまよふも虚妄の用  
とあらずとせしめられしとてははらと仰ははらと  
仰ふ安の一字あはれら廉とおはるしとてははらと

へきと我執の安あらん中とや儒ははらと仰の  
あり孔子の廉儀あり仰者の襟袂もはらと  
はらと仰らり文と教とは何と論語をまじ  
とや畢竟とせしめ虚妄のまじらひをきとて  
能清の家凡よりと家と仰て酔ふくら今仰の  
いせ代の用とせしめ四民とせしめ五倫とせしめ  
はらと仰らるるおの坊とせしめ新起の真假とせしめ  
あり今仰の儒ははらと安んずとあはれ入て世代の安とせしめ  
きかきしはらと仰らるる世風雅のはらと孔子の虚妄  
とせしめはらと仰に今の危家い世界とせしめとて虚  
無といふ今日のれと失りしはらと書物の曠と安んず  
とせしめ孔子の道徳とせしめはらと仰らるる

みあゆ上

七







一子も論者の作とすべし一と教へ維たの同病  
 擬ふと我らの字者も勿論一とむし  
 誹諧の名近とすも滑稽者に諷諷の本懐と  
 ちとすも軽口とのそむけざるんをたれ  
 片敷と辟破とむしとらる文教の先後と  
 とけて儒術のそとと差ふと一剛一能諧  
 の微中あり一季曲と大綱の辨一なる一  
 夏が冬扇 此四字を解る方めあむ或人の  
 後即し入玉元論衝云作無益之能納無補  
 説猶如以夏進が以冬扇亦徒耳  
 燔人 老子孫序一燔也憤俗とす一教と  
 人知あるは一そはもいふやとて字文がなりと

此語と例の漢文より五篇の諷諷とるよまは  
 夏と冬扇と各ありとある一  
 梓行沙汰 此段と十論の時宜ありけあよけ論の  
 板行も祖意の減は二十年して即家の時を  
 はわとせん誠一教その二代孫も預知様嫌と  
 け序一祖意の尊安と信と一此語の引とまは  
 一有りて世はのけとある一貞享式のはは  
 い才一改一ありけ式の新旧よんをと一  
 過當 遺稿所説一過當の二字は我々の譯あり  
 き一の天道の寂然不動とありて大道廢有  
 仁義とつらたれと大道動とそ人の言あり  
 けと詞の對の揃とて一也の與廢と一時



あはれも此の節面とせしむるなり儒者の孔子と  
せしめりし言詠の事とせしむるなり嘖々たる  
と失ふも此の節下の詞とせしむるなり嘖々たる  
急緩のさしつらり一節と緩詞といふ廢と急  
詞といふさしつらり勸懲の用ありてこれの文は  
人とせしむるなり美惡の心とに美の端といふ  
老家の字は格と人とせしむるなり美の衡と  
直往の害といふるに文章のさしつらり  
連綿の美ふも此の節の詞といふるなり  
急詞も此の節の詞といふるなり  
儒師の二万卷といふるなり尋竟の言詠の節  
とある一と十論一節といふるなり

第一段

天道贊 史記滑稽傳 孔子曰六藝之於治一也  
礼以節人樂以發和書以道事詩以達意  
易以神和春秋以道義太史公贊曰天道  
恢々豈不大哉談言微中亦可以解紛  
秦傳滑稽贊曰善言笑言然合大道楚優孟  
贊曰常以談笑諷諫云  
談笑諷諫 白馬教誡訓 史記を諷諫の二字  
といふ此語の贊といふるなり  
いさか父とあはれ友達とあはれけむに  
る一面といふるなり



りて竹とちまきとてくけいふ人よ遠所なるははふ人  
しかしやまきとけいと雇ふ人ありあはれいそは様  
とてくけい凡諫とて綿の中にならぬあはれ  
のまきにいりふ人とあはれとてなれと漸く修学と  
ついで我とあはれめりてあはれいあはれとあはれ  
割膝のまき見よりいりる色の中にも人びと  
ありけりなれりいりるまきとていりる孔子の互諫の  
諫しも属辭比事春秋教也といふをくけい  
諫諫といふと書し知我といひ罪我といふ  
勸懲の遠慮とあはれとていりる孔子路とて  
とていりる詩之諫書之不講是丘之過也といふ  
といりる一詩号連他といひるまき諫諫の

諫諫のたよりとて諫笑あはれ諫笑とて和節のま  
ありとてあはれとて諫笑あはれとて西窓の人あり儒仰  
し信んじあはれとて諫笑あはれとて今も能諧  
の諫諫あはれとてあはれとてあはれとていりる  
れまきとて五美中にも諫諫とあはれとて世の一道  
と建をとていりる七十余国といりるのまきとて  
もあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて  
兵非斯人之徒而誰與とていりる大丈夫のまきと  
とてあはれとていりるあはれとてあはれとてあはれと  
一對といりるまきとていりる五美諫の解とていりる

滑稽 史記評林崔浩云滑稽骨稭流滴哭也  
轉注吐詞終日不已言出口成章詞不辱身

滑稽

史記



辨云史記上滑稽旨の贊へあふむちらひに  
虚言の先後しちりしむに談笑の諷諫  
とてさきも凡い世情の和説にあふむ  
滑稽滑稽利よくあふむ或は智計疾出  
或は敏捷の要に達するもさふ會へ司馬遷り  
微中解紛の四字より俳諧と遠く太史公  
勸破とてけり贊詞と近く東蒼坊に説破  
とてれりさふ會

俳諧 史記索隱姚察云滑稽旨猶俳諧辨云  
俳諧の二字は漢書にもありてかくのこしく方ぬ  
ちりと古今集にも八千おる俳諧の二字と  
品題とあふむと別し俳諧の二ばありて或は

の俳諧とて各ふのばはちりしやけ頃の式同抄  
る俳諧も俳の音ありとやきしひありと所ぬ  
る史記の沙文と居くへきをれり人の鹿馬  
とありて笑威の字ありとあへりむ多に言篇  
と人篇の沙は十論一部の大口諷とある一  
りて柳子庵の遺稿後話と俳諧の二字と淨  
とて史記の諷林の褒貶ありとめ後話の略文  
しちりて滑稽傳に九段ありて之段は司馬遷  
本書あり六段と指す孫の附録ありとさふ會  
俳諧の諷諫とちりてに或は主賛とせり  
淨ありと列辰云滑稽旨者全鄙藝乃直  
従はる藝に在詔来此即太史公滑稽旨也

滑稽

十一



云滑稽言而引之六藝云語又意又不相属也  
有誤之也滑稽等之俳諧と云々ぬのこにあは  
面くの鼻柱掛在と云云の子ぬとも  
云々ぬのやち心六藝云の用と云々ぬれ中  
天下の通称と云云儒術も連能い世れの能  
と射御と書教のこつ家の六藝云ぬぬ或ん  
と事と云云と云云と云云と云云と云云  
或んぬぬと云云と云云と云云と云云  
ある一と云云と云云と云云と云云と云云  
と事と云云と云云と云云と云云と云云  
らぬぬ孔子の軍法と丹有に云云と云云  
孔子一物物の取あつぬぬと云云と云云

滑稽言

云と云云ぬれ孔子射御も書教も風雅の  
文あると云云野也と云云孔子の弟子と云云と云云  
得物と云云と云云と云云と云云と云云と云云  
ありぬぬと云云と云云と云云と云云と云云と云云  
中品以下に一通と云云と云云と云云と云云と云云  
等しぬぬと云云と云云と云云と云云と云云と云云  
も下学も今の急用あると云云と云云と云云と云云  
二子と云云と云云と云云と云云と云云と云云と云云  
六藝の孔子に云云と云云と云云と云云と云云と云云  
批下と云云と云云と云云と云云と云云と云云と云云  
ぬぬと云云と云云と云云と云云と云云と云云と云云

遊言語

白馬大綱と俳諧の對向あり同日俳諧

遊言語



言説と家と一て世にちりくる道ありこれ  
一に科の二と一掌我子貢と祖と一を對言  
かしてさるる言徳の用とるをばらちる也  
一儒師あるの家としに言行の二とをばらち  
けり論説と徳ありい言語と子貢は  
いふて力におもひて言ひて人へ施す  
言と行とを天地の已用ありるはたさるる  
はこそ也何し我貢と祖といふ政といふ  
の入用ありて文字をこの道の化轉せられたる如  
の孔子のちと界の人へ信せられたるはと力に  
はしこの河難に二葉といふ言といふは子貢子  
貢も説とちりてなれと師授といふ儒書

子儒書とてはこれの言と書と一言説者仁  
之文也歌樂者仁之和也といふは言説の  
大切なり道に自然の用ありて法とおこあ  
先ある道といふはちりて言と書と一は  
言説の似而非ちりて言と人のありて言と書と  
いふはちりて言と書と一は言と書と一は  
七徳の要ありて言と書と一は言と書と一は  
言と書と一は言と書と一は言と書と一は  
あつちりて言と書と一は言と書と一は  
言と書と一は言と書と一は言と書と一は  
言と書と一は言と書と一は言と書と一は  
言と書と一は言と書と一は言と書と一は







論語

十五

禹湯文武

遺行入之祿本の科行も禹湯文武  
付てくとも下に周公とや連きし併し孔子  
他諸の訛諫とちちのくとも孔子の書入あり  
もあゝあゝとけりて祖承の字割あり是所の  
係ちあり或ちけりてこれらあはれはの枝  
かゝるもなれしけ二句の十論の大綱をん例の  
過當ともくうぬつるやけある辨の後動  
あきらむはの未詳のち後表のほともて  
例の遺行もくちまて

詩

詩の媒一貫抄の孔孟論一儒仲の建立と併  
て仰るの釋此の異端とせちて虚妄の二  
の自在ちりと祿とて備の大略一尺世の意用

儒はとも事とも事来し推是の傳ると信とも  
へ滅なは人の説らるる孔子と論語の  
九二の備し正とてくち権ともてち同向異  
答の虚妄自在ある長沮桀溺の事懐いと  
かひて異端とて攻めりともて曾子有子より  
かきけりともち孟子の論はのり海て  
朱程の末の世ともかひり権者のほはあれ  
をれとも孔子の遺書にあてて家語と孔猛はち  
言あり史記と司馬遷ら誤あり西方の事人  
老子のくちちち異端と攻め玉師の專治  
ちらひのれくも教をにけりて孔子のくち一言  
も世くとも世界の人の氣のけちるるに論語一部

論語

十五



と祿りたりて非利揚墨を以てしんま  
一好する人ありて其を以てて孟子と魯を  
その虚を以てくくりて言語の即ちより  
はるる舞の舞の舞と負せりハ飢饉の年の新  
も食ふ所一石の食を以てて下民の振を  
圖るもやその海濱う天下のわいて親と  
きりておあんなを以て論語一宰我とせり  
井仁の仁も亦ある一とを以て好する人と  
とくくりて直奴はくり言とせり孟子の  
公孫丑一むりて知言の自讃のむり 釈迦  
い七子余を以て念神誦押の文と説のくを  
維の連ののの禪はとせり一とてはるる

のわいありて例の虚とりの文とわい  
釈迦の異端とてせりなりと軍代の  
謀りて敵と陸方とを以て合点せりこれ  
の人くくりて其を以ての文とわいなり  
一も三肩衣とてこれを以て論語一和即の文用  
これとわいしつれと節しむを以てや論語  
らこれ論語とせりなりて減し此の虚  
其の虚しなりて唐天空の儒者仰を以て  
我々の流るる連音仰とくはけ和を以て  
の老文とてくくりて醋吸のく老の二層とやり  
て酒盛の拍子に等とてくくりて説の  
秘はりて媒の二字はけ一對とあるべし

の海の上

の海の上

の海の上



猿田彦

猿

神代卷先驛者還白有一神月大  
八達之衢且鼻長七咫北月長七尋眼如  
鏡而赫然似赤酸怪面云按云以天津  
兒屋狼臣天鈿女等と皇孫の供として  
猿田の汝女のおうことひ鈿女の情のほひこと  
つる尋竟に弱とあり強かひつる此語の家  
の訓諫をたふさし凡雅の仙優と云れり此  
辨ハ才二論の神農皇帝の下より見よ  
凡推俳優 齊部宿祢廣成古語拾遺天照  
太神赫怒入于天石雲虚八十万神於石雲虚  
前二平庭燎巧作俳優相與歌舞云按  
もるに仙優の二字ハ漢書ハ俳諧雜賦也

こころをたれり宗廟の太神ハ仙諧の供  
司也さるるい言ハ大和の凡雅と云れり齊部  
詞と訓文ハ俳優と神樂のさるる  
ハ云 素戔嗚尊の御子ハ素戔嗚尊の御子  
かまはるるに素戔嗚尊の御子ハ素戔嗚尊の御子  
歌仲の帝と認いなりて此は仙諧のさるる  
みこころのさるるに素戔嗚尊の御子ハ素戔嗚尊の御子  
の帝に戯れなりハ素戔嗚尊の御子ハ素戔嗚尊の御子  
弁のあさくは人と云ふ地うと云ふ按云いそ  
いそと集の序詞ハ素戔嗚尊の御子ハ素戔嗚尊の御子

ハ云 素戔嗚尊の御子ハ素戔嗚尊の御子  
かまはるるに素戔嗚尊の御子ハ素戔嗚尊の御子  
歌仲の帝と認いなりて此は仙諧のさるる  
みこころのさるるに素戔嗚尊の御子ハ素戔嗚尊の御子  
の帝に戯れなりハ素戔嗚尊の御子ハ素戔嗚尊の御子  
弁のあさくは人と云ふ地うと云ふ按云いそ  
いそと集の序詞ハ素戔嗚尊の御子ハ素戔嗚尊の御子

るすゆ

ハ



つひ後章へ入る處をどうも文章の起結と雜し  
法式新四 梅よりだけ一段を言ふ處と心算に  
あつて新四の書はとこりては式の差ふ口傳  
ありとて今く皮裏の陽秋やいひしとあひ  
今の十論と世の機嫌とをとりて所し即ち  
あつて負享式と撰とてまゐるやこれの辨  
の二たよりにて聴者無妄則道不入とあ  
のり宗語と伯常の辨を片のや式の新四  
いへるに安きとてまゐる

檀林額 江戸八百韻に云ふとて檀林の本  
あり梅の花とて宗因の者句より檀林の名に  
世はゆへにや或と判踏はしむとて

ぬこ今より或と花とぬらとてさうらう  
さりの所とてよおやはれらるる宗因の  
比やとて所合とてを合とて花とてさうらう  
今く連きにかりぬらとて一語とて一語の論あり  
此よ宗因と者句も所句も皆く詞の根子  
のそりて意は早あまらるるあはれと物に  
とも檀林を所ともついでに所はれぬらとて  
あはれとて風とてさうらうとて祖の遺訓  
ふん今より五十年の書とてさうらう能潜の上  
もさるるしあはれぬらの子細を當時の風の歌に  
連よいぬらとてさうらうとて所はれぬらとて  
語の所合とてさうらうとてさうらうとて文章の所合と

右長上

廿九



論まゝの世の小字淨面だのときくら相成のほの  
誠とてあまのりまに石振の持論とあたら  
と我にやると百世の授託してれ子も地の成而乖  
ちりとも深くあておれり

唐虞先 此の子よふ父の字對と辨と一にまに  
いふのまゝとあつて義農のまゝとてあま  
まゝとてあまのまゝと極中極よぬまゝと唐虞  
の固より齊楚と對しつる剛の意と研り  
とも次々とあまのまゝとてあまのまゝと信  
る一十編の文此考終るまゝとてい例とあま  
誹謗不知 梓とてい此二句とい傳の要文とて  
まゝと論者と看做せるとい二句のまゝとてい

一にまゝとてい實奥儀より公任も梓信といはれ  
のまゝとてい法式とていあまのまゝとてい  
有人とていまゝとていあまのまゝとてい  
はれつる言篇の誹諧といまゝとてい論とてい  
人篇の誹諧とい史記とい姚察とい文とてい  
て凡解とい式とい皆くまゝとてい例とてい  
當のまゝとていたといあまのまゝとてい  
と誹林とい諧語潛利とい文とてい取ら  
自在といりけ類と洛の双林寺に假名の碑銘  
ありて二十句に七字の謎文あり謎の解方  
と漢家といはれといあまのまゝとてい

あまのまゝ

あまのまゝ











さらのりいふん十九の年に信とありて洛陽  
 一季のつと仰りて武陵一其角宛書と人  
 とさるし河川の芭蕉庵一信道ありて  
 の年ありてけし評し埋木下の書へ難ゆの  
 遺扶一配合あり才二版の老後の下一  
 天章一道理 じうしうの儒仰の大道も新その過  
 の七仰と仰りて孔子へ現在一七人の仰あり尚  
 へこととに虚多々の企ありん況や孔子の虚と  
 一しう多々に周公とさるひのひ一とあるは然  
 の他多用よりも百世よ王道の大からくあり  
 はれ一道理の祖とありん知はれし仰一信  
 とありて燃灯仰の授記ありといひ元稿一老

比とてつるも金とて家くの仲人ありて  
 今の地譜もそるるを左極の足し仰りて  
 一史記と仰文一て言偏と人偏といふ新  
 一の式と仰りて強の一字一十論と勘  
 凡雅無私 授とらに地結語一信の一字一と  
 ぬくあり十論と可即一古人とてとて他家  
 と違むといふゆもきとい儒仰の授記と  
 好惡一例の五のくせいあり貞室の二五年  
 古凡しとさるすの仰文とありて新仰の差  
 ぶと信とて一とつる信の一字の大騒りて  
 貞室式の用とて一室とて一とありて道  
 ありて一辨者の眼と着へまわ

凡雅無私

三



才二段

以雅道理 按よりたるを理と理家との差を白馬  
のむねくもるありて一仇諧の家此者のめくせもく  
るも世よのふりて天守の理の辨用よりてけりたて  
道のちるふとありけりたてて世のよるふとあり  
るをひらちる世に世らるねよ道の偏よあるをい  
世の論よとてやと論者の微中と辨をいせ  
るにたてたるの理よりて天理の動くふよるあり  
あり時よもあると人らとて世とてふていせあり  
ありいりきやれ時よとてふありありと時とてふ  
ありおらるるといふありとて喜怒とていふあり

とつるに踏くよありて一親ありとて世のせありと  
あり一人向の理家とていふもけりありとて儒師の  
後よりありてきとていふ儒名儒よありて道  
の高遠とてありとて世は一五倫のちる用あり  
仇諧とてやありとていふ

心天遊 莊子逍遥遊に希逸の賛詞あり遊者  
心有天遊と我はこれいふも天遊といふ寂然不動  
の先とてこれに美し理非といふも善也とて論  
のめあり遠く儒師の責重とていふも原を在  
のそと地とていふも一之道の向のありとていふ  
ありんまると才二段の要とあり

先後之承 先後抄の大略に我家の者のめく世の先後



とありてある一減。其の好意のさへ一星のちひ  
あれるとて万物の証より一傳仰も説くべき  
と我々の傳はよく其の表とてせし傳教の虚  
の表とてしるも一虚の表とてありて實に  
も其の表とてしるも一虚の表とてありて  
とせしとてしるも一虚の表とてありて  
聖の傳より一とてしるも一時の入り用せし  
の次中より一とてしるも一虚の表とてあり  
向ふ空言の表とてしるも一虚の表とてあり  
万の表とてしるも一虚の表とてありて  
とあれるとてしるも一虚の表とてあり

報如れ子と持向とてしるも一虚の表とてあり  
のりぬとてしるも一虚の表とてあり  
先後の二子に我家の常後より一とて其の好意  
け証よりしるも一虚の表とてあり

二條法 白馬原道訓論語の和節と細りて  
二條の法にほありて訓の畧文に於て世の  
和とてしるも一虚の表とてありて老  
為す早とてしるも一虚の表とてあり  
解の虚言に自在なれとてしるも一虚の表  
史記の終末とてしるも一虚の表とてあり  
いそとてしるも一虚の表とてあり

白馬原道訓

論語







て世はよふらのある用とあきらみ十論一部をけこに  
出づけてえと建立の行路とてあへ

世情

世情 世情と云ふは世の情をいふに似たり。儒佛二様の民  
あつてまゝと親疎の別ありて佛家の空相と  
あるはあつてはらゝと又倫と云ふとせよこれ  
はらゝ世人ももて居るともいふを世の親疎  
とてあつてはらゝ人の機嫌とてはらゝ  
あつてはらゝといふは世の情をいふに似たり。儒の  
も自他の交の二つありて記も和の二つあり  
とてあつてはらゝ人の眼力とて相似のはらゝ  
あつてはらゝといふは世の情をいふに似たり。佛の  
あつてはらゝといふは世の情をいふに似たり。佛の  
あつてはらゝといふは世の情をいふに似たり。佛の

時と詩のつらなり序求とぬむつとせ

俳諧

俳諧 古人 俳諧と云ふは古の松とて不似あつてはらゝ  
い奥羽より抑の俳諧あつても遺行、夜話、我々の  
奥羽より抑の俳諧あつても遺行、夜話、我々の  
あつてはらゝといふは世の情をいふに似たり。佛の  
あつてはらゝといふは世の情をいふに似たり。佛の  
あつてはらゝといふは世の情をいふに似たり。佛の  
あつてはらゝといふは世の情をいふに似たり。佛の  
あつてはらゝといふは世の情をいふに似たり。佛の



此詞の過當より、代内の家匠もけりたる一はれ  
いひゆく我門のままの人ありて此詞とて世に  
傳へん事とて、系訓の密語あるを我はらるく  
故書の歎息とあらば孔子より系傳の釣詠あれ  
や、やうそな事とて詞とせりて湖南より武に  
しはらるる、その時の家匠よりありて、まきあめ  
ちる其角も例のあつて、他人の句侯のめあつ  
も自己の此語の暗くんと、此詞のほほとめりて  
す、まはらるる言語の表とて、その家匠のあつ  
ま、こ地あつて、まらるる難解の遺書とあらば  
我はらる、此語の罪人とありて、古今のまきあめ  
く、まのこの斯くもあつて、まらるる遺書の報恩

あつて、まらるる此語の表とて、まらるる  
此語之詩歌 按、まらるる五字は、まらるる十論の  
終りて、まらるる一むらり、まらるる連語とて、四家  
四行とせりて、詩とて、此語の表とて、まらるる  
酒居ありて、此語之連語とて、連語之此語と  
まらるる、まらるる、佛師も連語ありて、まらるる  
まらるる、教者禪者といひ、れり、まらるる、まらるる  
まらるる、論語とて、まらるる、其智可及、其愚不可  
可及、まらるる、過猶知、まらるる、孔子の下学の用あり  
法、まらるる、頓漸のあつて、まらるる、まらるる、まらるる  
まらるる、まらるる、まらるる、まらるる、まらるる、まらるる  
此語の所ありて、まらるる、まらるる、まらるる、まらるる、まらるる、まらるる

此語の所ありて

此語の所ありて



の事詠ちりたりて他詠之詠なりと云り  
誠と宗祇宗長より兼載紹巴の建事として  
も耳におおしににほして尾も入るも面なる  
へ例の事詠うして他詠をたのむるに年についで  
ニきく意しと云ふれどもさきく思非もたのむる  
やれぬもく洞もさきく思非もたのむるに今  
の詠詠なりと云は柄と云はけ比の風言よる  
てはくあやうとのさきく思非もたのむるに  
名やうして詠うと人の面はちりたりや  
の事遠波 助辞要序云助字者詞急後而可  
知物之差別と云ふと云ふ言詠と音韻の二  
情愛もその年もあるべし急後と音のあり

うて雅俗の韻のひまことと云一今按さうた  
西りの音に山人花さきく思非もたのむるに  
いさくさうと云うてと云うけり今く俗詠  
あんにいさくさうの雅言いけりて人あくる  
この事と云ふるに俗中の雅と云はくは  
て西行の一代一首の撰おといふと云ふに  
詞とかさうと云ふく詠詠をたのむるに富士の音は  
凡と云ふくもありの作さうと云ふに杜子貞  
の態字は妙と云ふる春水鏡深と云ふ野航恬受  
とも縵侵堤柳とも縵捲浪花とも皇代  
といふ月涌と云ふるこれの物詠の句と云ふ  
ありて語不驚人死不休と云ふる凡雅の

西行

七五







子貢<sup>ラ</sup>詞也<sup>ナリ</sup>了<sup>ス</sup>其<sup>ノ</sup>有<sup>ル</sup>者<sup>ニ</sup>温<sup>ク</sup>而<sup>シテ</sup>勸<sup>ム</sup>善<sup>ナリ</sup>也<sup>ナリ</sup>則<sup>チ</sup>其<sup>ノ</sup>言<sup>ハ</sup>字<sup>ニ</sup>我<sup>レ</sup>子<sup>貢</sup>時<sup>ニ</sup>者<sup>ハ</sup>厲<sup>ク</sup>而<sup>シテ</sup>懲<sup>ム</sup>惡<sup>ナリ</sup>也<sup>ナリ</sup>子<sup>貢</sup>論<sup>語</sup>者<sup>ハ</sup>知<sup>ル</sup>世<sup>ノ</sup>等<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>機<sup>ヲ</sup>變<sup>フ</sup>而<sup>シテ</sup>知<sup>ル</sup>其<sup>ノ</sup>時<sup>ニ</sup>之<sup>ノ</sup>七<sup>ニ</sup>十<sup>ニ</sup>弟<sup>子</sup>則<sup>チ</sup>可<sup>ク</sup>知<sup>ル</sup>其<sup>ノ</sup>日<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>孔<sup>子</sup>自<sup>ラ</sup>常<sup>ニ</sup>矣<sup>ナリ</sup>然<sup>レ</sup>其<sup>ノ</sup>聞<sup>ク</sup>而<sup>シテ</sup>所<sup>レ</sup>知<sup>ル</sup>者<sup>ハ</sup>上<sup>ニ</sup>智<sup>者</sup>聞<sup>ク</sup>一<sup>ニ</sup>而<sup>シテ</sup>知<sup>ル</sup>二<sup>ニ</sup>了<sup>ス</sup>則<sup>チ</sup>十<sup>ニ</sup>麼<sup>ク</sup>可<sup>ク</sup>知<sup>ル</sup>万<sup>ニ</sup>麼<sup>ク</sup>可<sup>ク</sup>知<sup>ル</sup>從<sup>リ</sup>本<sup>ニ</sup>万<sup>ニ</sup>法<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>一<sup>ニ</sup>理<sup>也</sup>則<sup>チ</sup>也<sup>ナリ</sup>下<sup>ニ</sup>愚<sup>者</sup>聞<sup>ク</sup>一<sup>ニ</sup>而<sup>シテ</sup>知<sup>ル</sup>二<sup>ニ</sup>了<sup>ス</sup>則<sup>チ</sup>身<sup>者</sup>黑<sup>ク</sup>未<sup>レ</sup>賢<sup>者</sup>自<sup>ラ</sup>止<sup>ム</sup>争<sup>ヲ</sup>知<sup>ル</sup>時<sup>ニ</sup>宜<sup>ク</sup>之<sup>ノ</sup>變<sup>フ</sup>矣<sup>ナリ</sup>爾<sup>者</sup>有<sup>ル</sup>則<sup>チ</sup>論<sup>語</sup>之<sup>ノ</sup>二<sup>ニ</sup>與<sup>テ</sup>十<sup>ニ</sup>者<sup>ハ</sup>將<sup>シ</sup>直<sup>ニ</sup>子<sup>貢</sup>之<sup>ノ</sup>方<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>癖<sup>ヲ</sup>迎<sup>フ</sup>知<sup>ル</sup>忠<sup>ニ</sup>立<sup>テ</sup>八<sup>ニ</sup>段<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>違<sup>ハ</sup>而<sup>シテ</sup>令<sup>レ</sup>威<sup>ニ</sup>子<sup>貢</sup>止<sup>ム</sup>者<sup>ハ</sup>必<sup>ズ</sup>定<sup>也</sup>也<sup>ナリ</sup>

儒  
仲内證

あんにらぐるの奥慶とよかに釈如來の道と阿難とあがり孔夫子のんと孟子といひたり

唐も天竺もこれいかにあけい我おもをれと傳て吾は法を子の仲は王代より非をいひ仲ととよは然上人の念佛をよは違あまといひちやうくは蓮あまにといひれんといひてそのち親意も目蓮も道とて仲の信といはれけとその弟子此をいひたりて隱之の道も本庵といひぬやうく阿難といひぬ好色の浮いふあれん本庵といひぬ子よお裏の法ありけり富貴の人をいひたり王侯の家いありて茶の湯のありて酒盛のゆへも和といはれといひれいかにうるといひぬ一時の相あり候といはるの建えと他行の歌といひぬ家とかいひぬ火難



みね

四

水災の憂ある者あり古語も才子と仰の  
中法と減とてしる拙も天命の次第あり  
とらるる一今も眞存とて商の性面也

頓

漸 四教後も頓漸秘密不定の口はと仰  
の上此次第ありとて佛書も温厲の二は  
一とて仰とて仰とて仰とて仰とて仰と  
薩とて仰とて仰とて仰とて仰とて仰と  
とて仰とて仰とて仰とて仰とて仰と  
の判者の下に互見とて

蒼文自在

作説も蒼文とて虚言もはれとて  
の障ありと教誡とて虚言もはれとて  
とらふはれと拙論とて虚言もはれとて

いふはあつふと蒼文といひしとて  
いふ人もあつふとて我とてとて  
の辨も見合とて今や和漢の訛人しと  
人磨とてとてとて佛仰とて人の虚言  
はるるに蒼文のえ祖ありとてとて  
の者ありとておに杜陵とて西りと  
とて祖の差ふとてとて

我身功

獅子庵の遺稿も之性圖とて子也  
の中に之人の像あり益とて五老并の許  
賛とて先師の筆あり今之類圖の類也

稲妻とてとて人のきとて

芭蕉の

とてとてとてとてとてとてとて  
とてとてとてとてとてとてとて  
とてとてとてとてとてとてとて

みね

四



託の目此何れなりて早かてん 東巻坊  
其まうにけしき事とと老のむ性とてふとありあらん  
減し和氣のむ性と圍中し例の智法とてい  
ぬ處の人と看破とれへ内電の垂りもたてめき  
なりてこれに温厲の二おももる一とお竹と  
なりて中依のるやうてばよありい文もあらん  
能諧も人の好意かかごもやとさきて日とら  
ととりはて東巻坊と師命とまねて難性  
遺法といなりて在今し誹諧のふと説破して  
天下の舌口と坐断をもとて道し建立の常  
にあらぬもまられば國と識文よりて言に和氣  
の陰法とまねて也

佛頂和尚 け和尚の在やと天和貞亨の比あり  
播磨し盤珪禪師といひ江ノ上は佛頂和尚と  
よ天下し龍虎の名え識ありつれは凡雅と  
新のりてを武城の深川し禪利ありて  
芭蕉庵したとにちり

克後樂 遺稿の五秘し難性<sup>の</sup>遺法と通あり  
へ豈緝ニ牧あり横折一牧い遺物の言あり  
はると減ね二十二年とては定かへ深く秘し  
とれくうらと老ねの糸といふ金言の妙教  
るし和氣の竹啼ちる具言也善く人と遺言  
の教と傳りて吾世の記念よ好むりの也

西巻坊

三



一 杖田への水は、字を去るに難い水なり  
ちりあふ、お栗の味と、中々、中々、  
水は新く、味をなす、  
一 浮子への水は、字を去るに難い水なり  
お栗の味と、中々、中々、  
不意ちりあふ、お栗の味と、中々、  
一 浮子への水は、字を去るに難い水なり  
お栗の味と、中々、中々、  
一 浮子への水は、字を去るに難い水なり  
お栗の味と、中々、中々、  
一 浮子への水は、字を去るに難い水なり  
お栗の味と、中々、中々、

之禄七年十月日

之禄七年十月日

一 浮子への水は、字を去るに難い水なり  
お栗の味と、中々、中々、  
一 浮子への水は、字を去るに難い水なり  
お栗の味と、中々、中々、  
一 浮子への水は、字を去るに難い水なり  
お栗の味と、中々、中々、  
一 浮子への水は、字を去るに難い水なり  
お栗の味と、中々、中々、  
一 浮子への水は、字を去るに難い水なり  
お栗の味と、中々、中々、

之禄七年十月日

一 浮子への水は、字を去るに難い水なり  
お栗の味と、中々、中々、  
一 浮子への水は、字を去るに難い水なり  
お栗の味と、中々、中々、  
一 浮子への水は、字を去るに難い水なり  
お栗の味と、中々、中々、  
一 浮子への水は、字を去るに難い水なり  
お栗の味と、中々、中々、

之禄七年十月日







何よりと終ちりたり親も是も向ふし乃て  
凡よる事あり我と是格と一とそれと孔子も自ら  
とて自己と志れよの教也あらねけ段よを  
の詠美らと固其名双六の遊よめんてあま  
能詠とよあてと我とよとひ幸とらて能詠と  
くやむともそのあよとあらんこれらに  
老人の用とてとて遠林の款切と感と一  
人間遊所 梅とらに世詠と例の如挫して古風  
老人の如居とほしくあるせきとよ論詠富而  
可求也雖執鞭之士吾亦為之知不可求從  
吾所好とつるも詠と詠諷の人と見てよ時  
の措詞ありとやく言詠の表裏とあらはに

孔子の吾好<sup>不</sup>遊つむと宮のやも言に人間の如  
とつるもあつる今けけ詞と利とれまゝな今  
け詞と宮とれん能詠のそ地これの端の  
字もわくと油ひとや一とくも也

傳曰

神曲辰黃帝 梅とらにけ一對ハふも猿田細女の  
子格ありとつるのけとつる也神曲辰と例の  
木字少衣ととらて百竹とあも。もつちたうく  
黃帝と帝に衣冠とつるして國あるの理論  
よそ格とほくとつるも圖と虚實の仲とつる  
六義 六美と詩格の詠ありて凡を軍内の護とつ  
雅と朝廷のよとつる頌と君王の徳とつる雅頌と

の書あり

九八



















一対面の自在と案をも一誠一言詔の大抑り  
らとら北影回しつやもいいて小人之言同平君子  
者不可言察とあけき一七言詔いせらと人  
むらういへていふ人の言とあらうらとらと

道文章 白馬文章訓入る文章の用いす  
く一衣冠のめりあはらる幾一羽毛のあやわ  
雅俗もさる早もさるもせきし一水母の殻  
はれや海中とあらういありく道文章と  
りて人いはる文章もさるもせきしとあらう  
と孔子も子言いして言み足志文句足言  
不空言誰知其志言之無文行之不遠とせ  
とらうい道とらむいふ文のさるらとらと

らてと道の文章に孔子ら幾言といへり  
助衆いづくもこれ意とあはれはよと富言と  
而のうらり物の形容も過當ありとあらう  
の七子本意と幾言もあり富言あり詔詔  
もあはれ雅言もあはれ一字一三言も文章とあら  
らと一物と讀はるとに言に正言の言も  
あはれ詔詔の字もふたれはるも入らも詔  
あらういへ和玉の扁とあらういへるもと秘密  
の二はとへ阿提羅波提羅叫し唱はる厄病  
とあらういへ物ときくもあらういへるも  
指と一唱し可言の功徳ありと七言も  
のる詔あらういへるもあらういへるも



て二道とさういふものもあつたが、  
の文とさういふものを用とさういふもの  
一万巻あるといふものもあつたが、  
子細あり、さういふものもあつたが、  
書十五巻の字とあつたが、人のよちあつた  
とあつたが、文とさういふものもあつたが、  
能滞の手とさういふものもあつたが、  
一とつたが、一とつたの通称あつた

滑稽、詮人、持もつた、儒書、も、仰、お、も、は、も、つ、人、あ、れ、  
論、も、つ、人、あ、れ、も、軟、断、も、何、あ、つ、か、く、さ、う、い、ふ、  
何、あ、つ、か、く、さ、う、い、ふ、も、同、と、さ、う、い、ふ、も、同、と、  
あ、つ、か、く、さ、う、い、ふ、も、同、と、さ、う、い、ふ、も、同、と、

かゝる古語、雑字、とは、い、ふ、か、或、は、何、偏、の、何、偏、の、  
と、文、字、を、穿、鑿、し、ん、と、さ、う、い、ふ、な、さ、う、い、ふ、  
味、と、い、ふ、付、は、我、好、の、書、人、と、い、う、ら、う、て、我、胸、の、論、語、  
と、い、ふ、一、我、胸、の、法、を、と、論、語、と、い、ふ、文、字、を、  
不、慮、し、て、再、と、い、ふ、應、變、の、心、を、あ、つ、た、善、心、  
も、付、の、お、も、に、よ、る、一、さ、う、い、ふ、滑稽、音、の、他、文、も、  
あ、つ、た、が、例、と、檀、林、の、持、も、つ、た、が、  
優、旃、の、凡、の、お、も、に、よ、る、一、さ、う、い、ふ、  
の、も、つ、た、が、一、さ、う、い、ふ、も、つ、た、が、  
中、下、を、い、う、庚、申、の、お、も、に、よ、る、一、さ、う、い、ふ、  
の、陰、室、の、諫、も、一、さ、う、い、ふ、も、つ、た、が、  
胡、亥、の、可、分、別、と、い、ふ、も、つ、た、が、

滑稽

二















ある一説と危行言はしりて子所の二語を以てよく  
あつらひて子所くしりて又過をたれ知過而改過より  
たれと過といひてちもせよとて死やうとてあやまら  
ぬとちも二書無無記の人といひて所はの家を説き  
ありて所の孔子も言説の過ありて陳司敗とて人  
とて丘也新しよとていひたりていひての字を直  
徳行といひて仲子といひて政といひて丹有季路といひて  
又孔子もそと書物の下に子所とてあつらひて子所を  
すつらあし言はれり木遣の抱子とてあつらひて子所を  
とて訓くともいひてあつらひて何とていひていひて  
も言説も名のそとぬとて知安の孔子とてあつらひて  
たれとて達蒼の人といひてちもせよとて世界の人は及りぬとて

子所

子所

たれとていひてちもせよとてあつらひて子所を  
すつらあし言はれり木遣の抱子とてあつらひて子所を  
とて訓くともいひてあつらひて何とていひていひて  
も言説も名のそとぬとて知安の孔子とてあつらひて  
たれとて達蒼の人といひてちもせよとて世界の人は及りぬとて  
とていひてちもせよとてあつらひて子所を  
すつらあし言はれり木遣の抱子とてあつらひて子所を  
とて訓くともいひてあつらひて何とていひていひて  
も言説も名のそとぬとて知安の孔子とてあつらひて  
たれとて達蒼の人といひてちもせよとて世界の人は及りぬとて  
とていひてちもせよとてあつらひて子所を  
すつらあし言はれり木遣の抱子とてあつらひて子所を  
とて訓くともいひてあつらひて何とていひていひて  
も言説も名のそとぬとて知安の孔子とてあつらひて  
たれとて達蒼の人といひてちもせよとて世界の人は及りぬとて

子所

子所











あつたりし一應聘<sup>ニ</sup>十國<sup>ニ</sup>而屈辱<sup>ス</sup>於公卿<sup>ノ</sup>之  
其<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>遇<sup>セ</sup>也如此<sup>ト</sup>や<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>評<sup>判</sup>も<sup>レ</sup>七<sup>レ</sup>雄  
五<sup>レ</sup>霸<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>名<sup>と</sup>を<sup>レ</sup>た<sup>く</sup>あ<sup>ら</sup>む<sup>と</sup>大<sup>ニ</sup>敷<sup>も</sup>ち<sup>の</sup>孔子<sup>ト</sup>  
魯<sup>ノ</sup>名<sup>の</sup>を<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>り<sup>と</sup>必<sup>ズ</sup>く<sup>も</sup>ん<sup>可</sup>伸<sup>も</sup>可<sup>屈</sup>也  
世<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>機<sup>あり</sup>と<sup>や</sup>その<sup>レ</sup>冲<sup>控</sup>る<sup>論</sup>語<sup>ノ</sup>時<sup>ノ</sup>  
の<sup>レ</sup>多<sup>能</sup>と<sup>も</sup>双<sup>六</sup>も<sup>も</sup>う<sup>ら</sup>お<sup>自</sup>暴<sup>も</sup>も<sup>も</sup>一<sup>ニ</sup>線<sup>も</sup>  
天<sup>ハ</sup>上<sup>ノ</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>ん</sup>た<sup>れ</sup>と<sup>子</sup>貢<sup>も</sup>も<sup>も</sup>わ<sup>ら</sup>い<sup>て</sup>屈<sup>節</sup>  
束<sup>達</sup>の<sup>レ</sup>晋<sup>ノ</sup>人<sup>の</sup>権<sup>責</sup>あ<sup>れ</sup>り<sup>と</sup>越<sup>王</sup>句<sup>踐</sup>の<sup>レ</sup>追<sup>從</sup>  
は<sup>レ</sup>一<sup>ト</sup>も<sup>も</sup>世<sup>ノ</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>む<sup>と</sup>也<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>る<sup>論</sup>語<sup>ノ</sup>  
と<sup>諷</sup>諫<sup>と</sup>の<sup>レ</sup>一<sup>歩</sup>も<sup>も</sup>里<sup>ノ</sup>大<sup>ニ</sup>り<sup>あ</sup>ん<sup>て</sup>比<sup>し</sup>子<sup>西</sup>の<sup>レ</sup>  
楚<sup>王</sup>の<sup>レ</sup>あ<sup>ら</sup>む<sup>と</sup>貴<sup>忠</sup>誅<sup>諛</sup>の<sup>レ</sup>和<sup>説</sup>も<sup>も</sup>荆<sup>臺</sup>  
の<sup>レ</sup>遊<sup>の</sup>や<sup>ら</sup>む<sup>と</sup>孔子<sup>と</sup>あ<sup>ら</sup>む<sup>と</sup>也<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>る<sup>論</sup>語<sup>ノ</sup>

諷諫の鑑とてあつたりあつたりし尚ちそく  
秘し<sup>て</sup>も<sup>も</sup>お<sup>も</sup>秘<sup>し</sup>と<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>む<sup>と</sup>也<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>る<sup>論</sup>語<sup>ノ</sup>  
あ<sup>ら</sup>む<sup>と</sup>也<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>る<sup>論</sup>語<sup>ノ</sup>  
酒<sup>落</sup>む<sup>と</sup>也<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>る<sup>論</sup>語<sup>ノ</sup>  
あ<sup>ら</sup>む<sup>と</sup>也<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>る<sup>論</sup>語<sup>ノ</sup>  
終<sup>に</sup>あ<sup>ら</sup>む<sup>と</sup>也<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>る<sup>論</sup>語<sup>ノ</sup>  
其<sup>レ</sup>勝<sup>の</sup>る<sup>人</sup>と<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>む<sup>と</sup>也<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>る<sup>論</sup>語<sup>ノ</sup>  
と<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>む<sup>と</sup>也<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>る<sup>論</sup>語<sup>ノ</sup>  
今<sup>も</sup>酒<sup>落</sup>む<sup>と</sup>也<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>る<sup>論</sup>語<sup>ノ</sup>  
ま<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>む<sup>と</sup>也<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>る<sup>論</sup>語<sup>ノ</sup>  
ま<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>む<sup>と</sup>也<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>る<sup>論</sup>語<sup>ノ</sup>  
二<sup>程</sup>の<sup>レ</sup>時<sup>ノ</sup>也<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>る<sup>論</sup>語<sup>ノ</sup>

論語

卷











とあるは、人徳のこれ後、玉帛の信、河も他家  
の所屬し、有力の權、抑も詞の表、重と申すも  
は、んや、先と能、後、し、つ、時、の、柿、の、核、も、子、弄、心、種  
との、さ、り、六、十、の、國、の、美、地、は、括、り、も、一、是、録  
一粒、の、信、の、さ、り、乃、り、も、さ、り、は、れ、し、仲、業、も、  
心、施、賦、施、あ、れ、る、種、も、言、送、賦、送、あ、り、て  
表、し、る、の、優、者、も、あ、れ、し、信、の、さ、り、信、賦  
と、あ、り、し、信、言、と、し、信、賦、と、あ、り、し、は、れ、と  
善、は、り、し、は、れ、し、は、れ、し、は、れ、し、は、れ、し、は、れ、し、  
地、物、し、し、負、者、も、然、と、の、り、は、れ、し、は、れ、し、  
孔子に世代のよと感と一、たの、神、も、宗、統、の  
致、思、に、手、孫、の、粟、と、ら、ら、る、し、敬、叔、の、車、と

ち、さ、り、微、夫、二、子、之、賦、賦、則、丘、之、道、殆、將、廢、  
と、あ、り、し、は、れ、し、無、隱、乎、爾、と、の、り、是、人、の、言、語  
ち、り、に、使、さ、る、の、令、り、人、品、と、か、ら、り、し、は、れ、し、名、利  
と、い、ふ、人、も、意、の、名、利、と、我、と、ま、り、あ、じ、美、意、の  
誠、と、し、し、は、れ、し、今、し、信、と、は、れ、し、建、立、を  
の、り、は、れ、し、賦、用、と、も、あ、り、し、は、れ、し、  
陰、徳、白、馬、教、誡、訓、陰、徳、陽、報、を、教、の、は、れ、し、  
例、の、字、面、し、し、は、れ、し、一、は、れ、し、と、世、代、の、い、ふ、  
き、と、し、し、は、れ、し、一、は、れ、し、と、い、ふ、は、れ、し、  
ま、と、し、し、は、れ、し、と、人、の、あ、り、し、一、は、れ、し、  
も、金、の、地、に、あ、り、し、も、同、あ、り、し、と、し、し、は、れ、し、  
陰、徳、と、し、減、し、徳、の、あ、り、し、ら、る、き、し、し、の

る、新、書、上

卷、之、十、一







